

この1年を振り返って

会員 下田 真人



海外の裁判所

この1年の間に、短い日数ではあったが、海外（欧米）を旅行する機会に恵まれた。旅行先では、大都市はもちろん、規模の小さい地方都市でも、街の中心に建つ歴史ある美しい建物が裁判所として使われていることが多かった。

たとえば、北フランスの一地方都市では、正面には広い石段があり、高さ10メートルはあろう6本の円柱が林立し、建物を守るように神々の彫像が置かれ、壁面には立派な彫刻が施された白亜の神殿のような建物が裁判所になっていた。街の人々の信仰の拠り所である大聖堂の次に荘厳な建物である印象だ。

一方、ハワイ州の裁判所は、オアフ島の抜けるような青空によく似合う白い宮殿のような建物であり、カメハメハ大王の像や多くのヤシの木に囲まれて、ホノルルの街によく溶け込んでいた。

たしかに建物はあくまでもハコに過ぎないのだが、厳かなその姿を見ると、それぞれの街に欠くことのできない存在なのだと思うざるを得ない建物なのである。

欧米の映画やドラマの中で出てくる裁判所はいずれも重厚で趣のある建物であるが、多くは大都市が舞台になっていることが多いので、これまでは大都市ならではの建物だと思っていた。しかし、実際にそのような裁判所が都市の大きさに関係なく建っているのを目にして、その街の人々や社会の中において欠くことのできないものとして司法制度が脈々と受け継がれている様を具現化しているのではないかと思えるような迫力や伝統を感じたものである。

「代理人」として

弁護士登録をし、業務を始めて9か月目に入った（本稿執筆時点）。短い期間ではあるが、これまで、法律相談、交渉、訴訟等、様々な弁護士業務に携わることができた。相談のみで終わる業務を除けば、依頼者の「代理人」として活動することが業務の大部分であったように思う。

私は、この「代理人」という言葉に対して、弁護士になる前までは、アメリカのプロスポーツ選手のエージェントの姿として時折報道されていたように、マスコミを利用したり、ボイコットなどの強硬手段をちらつかせたりしながら、大きな要求を相手方にぶつけ、ギリギリの譲歩を迫る交渉のプロという強面のイメージをもっていた。

しかし、実際に「代理人」として仕事をしてみると、それまで自分が抱いていた「代理人」に対するイメージとは違う感覚があった。それは、依頼者の利益を最大限に追求する中でも、法律家として、相手方も含めた社会全体にとって有益なことをしているのかという思いが常に付きまとうことだ。理想の「代理人」像や、依頼者と自分の信念との板挟みになったときの「代理人」としての対処の仕方などは、一つの答えがあるわけではない永遠の問いかも知れない。

もう10年以上前の映画と思うが、ある有能なスポーツ・エージェントが、所属していたエージェント会社の高額契約獲得のみに価値を置くやり方に疑問を持ち、選手とエージェントとの関係を考え直す提案をしたところ、会社を追われ、苦労しながらも、エージェントとして選手と信頼を築いていく作品を観た記憶がある。

私も、これから「代理人」として業務をしていく中で同じように悩みながら、自分なりの「代理人」像を創り上げていかなければならないのだろう。